



Title	戦間期日本の高級船員に関する研究
Author(s)	三鍋, 太朗
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58275
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

本論文の課題は、日本海運業を対象として、高級船員の実態を、商船教育、海運市況および労働市場の需給状況などと関連づけながら実証的に明らかにすることである。

本論文は、序章、第1～第5章、終章から構成されている。序章「問題設定と分析視角」では、最初に本研究の目的と意義が示され、続いて当該テーマに関する研究史がサーベイされる。

第1章「戦艦期日本の商船教育－商船学校における船員教育」では、最初に通信省所管の官立商船学校と地方商船学校という2種類の商船学校によって高級船員を養成する体制が整備されたことが確認される。商船学校の教育課程には長期の汽船実習が組み込まれており、一方海運企業は自社で汽船実習を行った生徒を採用するなど、教育と実務・企業との関係は密接であった。昭和恐慌期には若手高級船員の就職難が深刻化したため、1930年代半ばまでに地方商船学校数は半減する結果となった。

第2章「高級船員の需給関係－1914～1938年－」では、高級船員の需給関係が一般経済情勢および海運市況に遅れて変動することが確認される。戦後ブーム期である1919年には極度の需給逼迫が出現し、第1次大戦期に利益を蓄積した海運企業による船舶建造、関東大震災による特需、バルキーな貨物の増加といった諸要因から1920年代には高級船員に対する安定的需要が生まれ、一転して1930年代前半には供給過剰が続いた。

第3章「高級船員の人事体系・賃金・労働実態－1920年代三井物産船舶部の事例－」では、大手海運企業に勤務する高級船員は「職員」として位置づけられ、それに見合う処遇を受けていたことが実証される。従来の社船と社外船という二分法は必ずしも正確でなく、三井物産船舶部のような社外船の大手は社外船一般とは異なった類型であった。三井物産船舶部の高級船員は陸上職員と共通性の高い処遇を受けていたが、高級船員の待遇には厳しい精神的・肉体的負荷に対する対価としての意味合いもあった。

第4章「高級船員の退職実態－大阪商船海技員の事例－」では、大阪商船の『海技員進退簿』を使って1925～38年における高級船員の退職の実態が検討される。大阪商船では第1次大戦末期に退職手当が拡充されたが、業績の悪化に規定されて1926年に退職手当の減額が断行される。ただし長期勤続者に手厚く報いるという方針は一貫しており、赤字に転落した1930年代初頭においても大規模な人員整理は実施せず、安定的な雇用が維持された。

第5章「中堅海運企業における高級船員の人事管理－三菱商事船舶部と北日本汽船の事例－」では、三菱商事船舶部と北日本汽船を対象として中堅海運企業における高級船員の人事管理の実態が検討される。三菱商事船舶部はもっぱら東京高等商船学校卒業者を新卒採用することで高級船員を確保したのに対し、北日本汽船では一貫して中途採用が重要な役割を果たした。終章「総括と残された課題」では、以上の各章での議論が整理され、その上で戦間期における技術変化が高級船員に与えた影響など残された課題が示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文の大きな貢献は、研究史の乏しい高級船員の実態について、商船教育、高級船員の需給関係を分析し、さらに社船、社外船大手、中堅海運企業を対象にして人事管理、賃金、労働、退職の動向を詳細に明らかにした点である。本論文によって、職員に位置づけられた高級船員の処遇と労働の実態が格段に明らかになったといえよう。したがって本論文は博士（経済学）の学位に十分値するものと判断する。

[5]

氏名	三 銅 太 朗
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学位記番号	第 24307 号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済学専攻
学位論文名	戦間期日本の高級船員に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 澤井 実 (副査) 教授 阿部 武司 教授 廣田 誠